

貨幣論としての『虞美人草』

— メディア都市 TOKIO の誕生 (2) —

勝 又 正 直

Soseki's "A Red Poppy" as a Money Theory: The Birth of Media City: TOKIO (2)

KATSUMATA Masanao

キーワード：ジツメル、漱石、大都市、文明、貨幣、女

Key words: Natsume Soseki, G.Simmel, Metropolis, Civilization, Money, Woman

1 はじめに

夏目漱石(1867-1916)は明治40年(1907年)6月23日から10月29日まで、その初めての新聞小説を朝日新聞に連載し、翌年春陽堂から出版した。『虞美人草』である。その一節に次のような文がある。

「蟻は甘きに集まり、人は新しきに集まる。文明の民は激烈なる生存のうちに無聊をかこつ。・・・文明の民ほど自己の活動を誇るものなく、文明の民ほど自分の沈滞に苦しむものはない。文明は人の神経を髪剃(かみそり)に削って、人の神経を挿木(すりこぎ)と鈍くする。刺激に麻痺して、しかも刺激に渴くものは数を尽くして新しき博覧会に集まる。・・・

蛾は灯に集まり、人は電光に集まる。・・・昼を短しとする文明の民の夜会には、あらわなる肌に鏤(ちりばめ)たる宝石が独り幅を利かす。金剛石(ダイヤモンド)は人の心を奪うが故に人の心よりも高価である。泥海に落つる星の影は、影ながら瓦(かわら)よりも、見るものの胸に閃(きらめ)く。閃く影に躍る善男子、善女子は家を空しゅうしてイルミネーションに集まる。

文明を刺激の袋の底に篩(ふる)い寄せると博覧会になる。博覧会を鈍き夜の砂に漉せば燦たるイルミネーションになる。いやしくも生きてあらば、生きたる証拠を求

めんがためにイルミネーションを見て、あっと驚かざるべからず。文明に麻痺したる文明の民は、あっと驚く時、始めて生きているなど気がつく。・・・」¹⁾ [強調、引用者]

この記述を、ほぼ同時代人と言っている、ドイツの社会学者、ゲオルク・ジツメル(1858-1958)の「大都市と精神生活」の次のような記述と比較してみよう。

「大都市的な個性の類型を生じさせる心理学的基礎は、神経生活の高揚であり、これは外的および内的な印象の迅速な間断なき交替から生じる。(中略)大都市は昔から貨幣経済の場であった。(中略)

経済心理学的領域での本質的なことは、この場合こうである。すなわち、原始的状态では生産は商品を注文した依頼人のために行われ、その結果生産者と買い手とはたがいに知り合いになる。しかし現代の大都市は市場のための生産、言いかえれば、本来の生産者の視圏にはけっして入らないまったく未知の買い手のための生産によって、ほとんど完全に維持されている。これによって双方の側の関心は、冷酷な主観性を獲得する。(中略)

おそらく倦怠ほど無条件に大都市に保留される心的現象は、けっしてないであろう。これはまず第一に、急速に変化し対立しながら密集するあの神経刺激の結果であり、大都市の知性の高揚もこのような神経刺激から生じ

貨幣論としての『虞美人草』

るように思われる。そのため実は、もともと精神的に不活発な愚鈍な人間は、まさに飽きることのないのがつねである。無際限の享楽生活は、神経を長く刺激してきわめて強い反応をひきおこし、ついには神経がもはやいかなる反応もあたえなくなるため、倦怠を生み出すのである。(中略)

このような心の気分は、完全に浸透した貨幣経済の正確に主観的反映なのである。貨幣は、事物のあらゆる多様性をひとしく尊重し、それらのあいだのあらゆる質的相違をいかほどかという量の相違によって表現し、そしてその無色彩性と無関心とによって、すべての価値の公分母にのしあがる。そうすることによって貨幣は、もっとも恐るべき平準器となり、事物の核心、その特性、その特殊な価値、その無比性を、望みなきまでに空洞化する。事物はすべて同じ比重で、たえず流動している貨幣の流れのなかに漂い、すべての同じ平面に横たわり、ただそのまとう断片の大きさによってのみ、たがいに区別されるにすぎない。』²⁾ [強調・中略、引用者]

両者の記述は奇妙に類似している。大都会での刺激による神経摩滅と新しい刺激への渇きをともに指摘している。

ところでジンメルの「大都市と精神生活」は大著『貨幣の哲学』(1900)の要約とも言える論文である。ジンメルは大都会の精神生活のこの特徴の原因としての貨幣経済を指摘する。本稿ではジンメルの指摘をヒントに『虞美人草』を読み直してみたい。

2 贈与物としての女

明治32年(1899)の「高等女学校令」施行以後女子教育熱再燃し、津田英語塾、女子医学校、日本女子大学など多くの女学校が開校することとなった。それに伴い、女学生(および女学校を出た女性)を扱った小説群が登場することとなった。

『魔風恋風』(まかせこいかぜ)はその嚆矢とも言うべきものである。この小説は、小杉天外の作による長編小説で、1903年(明治36)『読売新聞』に連載され、同年から翌年にかけて前編、中編、後編と春陽堂より刊行された。帝国女子学院の生徒、萩原初野と、東大法科の学生で子爵の養子となっている夏本東吾との恋愛を主軸に物語は展開される。

この小説の特徴はなんといっても人力車が頻りに登場してくることである。なぜ人力車がこの小説に頻りに登場するのか。理由は人力車に乗っている初音、あるいはその身代わりの妹が、東吾と初野に野心をもつ才子の美術家殿井と間をやり取りされているからである。

初音はきわめて優柔不断でほとんど見るべきほどの性格もっていない。むしろこの小説の特徴はその初音が二人の男性の間を文字とおり人力車でやり取りされ、揺れ動いているという点にあるのである。つまりこの小説では、「女」は男の間を歩き来する、「モノ」になっているのである³⁾。

レヴィ=ストロースの『親族の基本構造』⁴⁾は、「女」は婚姻関係を成立させる「贈与物」であったことをあきらかにした。しかしそこでの贈与は安定したものである。しかるに、この「魔風恋風」においては、主人公は二人の男性の間をまるでキャッチボールのようにいたり来たりしている。ここにおいて「モノ」としての「女」は浮遊する「品物」、いわば「商品」の性格を帯びてくる。

さらに小説の最後で、主人公初野は、東吾と添い遂げることを断念する。そして、彼女を「義姉(ねえ)さん」と呼ぶほどの親しい関係にある、夏本子爵の令嬢芳江と、東吾の手を取り、それを固く結びつけて死んでいく。

つまり、男の間をやり取りされる「モノ」であった初音は、最後には、男と女(モノ)を結びつける媒介の働きをすることになるのである。男(人)とモノとの媒介をするのは一般的には貨幣の働きである。モノから貨幣への止揚という契機がこの小説に見られるのである。

この観点から、夏目漱石の『虞美人草』を見てみよう。

3 貨幣としての女

『虞美人草』という小説は、一言でいえば、藤尾という名の女をめぐる小説である。

甲野藤尾(こうのふじお)は24歳、女学校出の美人。彼女には腹違いの兄、甲野欽吾(きんご)がいる。欽吾の友人にはおなじく東京大学を出て、外交官試験のために浪人している、従兄弟の宗近一(むねちかはじめ)がいる。宗近一には妹の宗近糸子(いとこ)がおり、家庭的な女である。

藤尾は父親の金時計を気に入っており、いつも玩具にしていた。この接触により「金時計」は「藤尾」の身代わり(隠喩)になっている。だからこの小説世界のなかで「金時計」は一貫して「藤尾」と一体のものとして語られる。

生前、藤尾の父はこの「金時計」をやると、宗近一に言っていた。藤尾を意味する「金時計」を宗近一にやるということは、藤尾を一(はじめ)にやることでもある。だから藤尾は宗近家の嫁に行くものと思われていたのである。

また宗近の父は娘の糸子(いとこ)をいとこの甲野欽吾の嫁にやろうと考えており、糸子もそれを意識している。つまり甲野家と宗近家は、相互に娘を嫁にやり取り

する予定だったのである。

レヴィ=ストロースによれば⁴⁾、婚姻関係は「女」という物を贈与する関係と見ることができる。ここでは甲野家と宗近家が娘を相互に贈与しあっている。つまり両家の関係は、あえてレヴィ=ストロースの用語で言えば、「限定交換」がおこなわれる、そうした閉じた関係だったわけである。

しかし欽五の父が外地で急死することで、事態は急変する。藤尾の母は、実の子ではない欽吾が、自分のめんどろを見てくれるか不安である。だからできれば欽吾を追い出して、藤尾に婿を取らせて自分の立場を安定させたいと考えるようになる。

ここで藤尾の花婿の候補として浮かび上がったのが、小野清三である。小野は東京大学を主席で卒業し、「銀時計」をもらい、さらに博士論文を執筆中である。藤尾の母は小野に藤尾の英語をみてもらうようにし、両者を結びつけようと画策している。つまり実の娘をできるだけ高く売ろうとしているわけである。

小野は京都で井上孤堂という先生の世話をうけており、そのかわり井上先生の娘、小夜子の将来の夫となることを約束している。しかし東京に出て、「銀時計」を獲得した今、小野はさらに博士となって「金時計」たる藤尾を獲得したいという欲望をもっている。

藤尾をできるだけ高く売りつけたいという藤尾の母の欲望と、美しい才媛である自分にふさわしい趣味のある男と結ばれたいと思う藤尾の欲望は、安定した女の交換関係を突き崩す。宗近一は藤尾をもらえず、また甲野家を出ると甲野金吾は宗近糸子をもらうわけにはいかない。また藤尾を獲得するために小野は井上小夜子を棄てるようにとする。

安定した婚姻の関係のなかでは、藤尾も、糸子とおなじく、家から家へと贈与されるものであった。しかし自分にふさわしい(等価な)相手を求めたり、できるだけ高く買われることを望むんだ結果、藤尾は一種の「商品」へと変わったのである。

それだけではない。かつては藤尾は宗近家へ贈られ品物であった。しかし藤尾の母は、藤尾(金時計)をつかって将来の博士(小野)を婿にもらう(買い取ろう)とする。ここにいたって、藤尾は贈与物から商品へ、さらに「金」(かね)という特殊な商品(貨幣)へと変身したのである。

作家夏目金之助(漱石)はこの藤尾という女(特殊な商品)のふるまいに、断固たる鉄槌を喰らわせようとする。つまりこの小説では、藤尾に見限られたため逆に自由になった宗近一の活躍により、小野と小夜子が、さらに甲野金吾と糸子が元のさやにおさまる。小野を奪われ、宗近一にも拒絶された藤尾は憤死するのである。

ところで藤尾と同一視される「金時計」はいかなる意味をもつのか。小野にとってはそれは帝大主席の銀時計のさらにさきにある成功と出世の象徴である。さらに「金」は貨幣(金)を意味する。「時計」はどうか。「時計」は近代的な時間を意味します。それは労働を測定しその価値を計る。だから「時は金なり」である。またそれは一国の共通時間を意味する。日の出、日の入りを「明け六」、「暮れ六」と呼んでいる、地域により、季節によって異なる時間ではなく、社会全般をおおう「普遍的な」時間なのである。「金=時計」の死によって、自然な時間、つましく自然な欲求と交換の世界がよみがえり、旧来の秩序は回復されるのである。

小宮豊隆によれば、夏目漱石は小宮に宛てて、次のように書いている。『『虞美人草』は毎日書いている。藤尾という女にそんなに同情を盛ってはいけない。あれは嫌な女だ。詩的であるが大人しくない。道義心が欠乏した女である。あいつをしまいに殺すのが一篇の主意である』⁵⁾。漱石は、貨幣としての女(藤尾)によって混乱させられた世界が、貨幣の死によってふたたび安定をもたらすことを描こうとしたのである。そのため「あいつをしまいに殺すのが一篇の主意である」と連載途中から弟子の小宮に宣言していたのである。

4 商品の殿堂としての展覧会

ところで、この小説では京都と東京は対照的な世界として設定されているように思われる。すなわち、京都は納まるべきものが納まるべき所に納まっている世界であり、東京は固定した関係が流動化し、絶えず新たな欲望が喚起される世界である。こうした「文明」の世界の典型としてこの小説にとりあげられているのが連載当時開催されていた、東京勸業博覧会である。

小説中からこの展覧会の描写をすでに引用した箇所であるがもう一度引用しよう。

「蟻は甘きに集まり、人は新しきに集まる。文明の民は激烈なる生存のうちに無聊をかこつ。(中略)文明の民ほど自己の活動を誇るものなく、文明の民ほど自分の沈滞に苦しむものはない。文明は人の神経を髪剃に削って、人の神経を播木と鈍くする。刺激に麻痺して、しかも刺激に渴くものは数を尽くして新しき博覧会に集まる。(中略)蛾は灯に集まり、人は電光に集まる。(中略)昼を短しとする文明の民の夜会には、あらわなる肌を鑲たる宝石が独り幅を利かす。金剛石は人の心を奪うが故に人の心よりも高価である。泥海に落つる星の影は、影ながら瓦よりも、見るものの胸にかんこう閃く。閃く影に躍る善男子、善女子は家を空しゅうしてイルミネーションに集まる」¹⁾。

貨幣論としての『虞美人草』

この東京展覧会でもっとも有名だったのは、不忍池に面した電飾で飾られた台湾館であった。漱石は登場人物たちをこの台湾館へ連れていく。

「イルミネーションは点いた。

『あら』と糸子が云う。

「夜の世界は昼の世界より美しい事」と藤尾が云う。⁶⁾

「空より水の方が綺麗よ」と糸子が突然注意した。(中略) イルミネーションは高い影を逆まにして、二丁余の岸を、尺も残さず真赤になってこの静かなる水の上に倒れ込む。黒い水は死に筒もぱっと色を作す。⁷⁾

作家はよくこうした短いせりふに作品全体の重要なヒントを滑りこませる。あるいは(フランス文芸批評かぶれのために) こういってもいい、小説の重要なヒントはこうした短いせりふに見いだされることが多いと。このせりふが指摘するのは、人々があつまっているこの東京博覧会はじつは「倒錯した幻影である」、ということである。そしてそれはとりもなおさず、東京を侵しつつあった文明のもつ倒錯性なのである。さらにいえば、宝石(ガーネット)の飾りのついた金時計(藤尾)のもつ輝きは夜の博覧会のごとく、人(小野)の欲望をかきたてはするが、それは幻の、しかも本来の欲求からは倒錯した欲望にほかならない、ということがこの箇所は示唆しているのである。

休息のため席についた甲野と糸子、左近と藤尾は、偶然そこで井上親子と小野を見つける。小野と小夜子は夫婦のように見える(あとで左近が小野に二人は夫婦のように見えた、と話している)⁸⁾。この夫婦のように見える小野と小夜子の関係に藤尾は烈しい嫉妬と怒りを感じ、この関係を壊そうとする。⁹⁾

元来、人は自分の欲求充足をそのための手段たる品物によって満たす。そこには欲求とそれを満たす品物との直的対応関係がある。しかし貨幣経済が進展すると、ひとは現実の欲求のためでなく、いつか生まれてくる欲求のために貨幣をため込み、しいては貨幣を多く獲得すること自体がその人間の欲求となっていく。欲求充足と品物との安定した対応関係は貨幣によって崩されていくのである。

商品(小夜子)と固定客(小野)とが夫婦のように納まっているのを嫉妬する、特殊な商品、それが藤尾である。つまり彼女は商品と客との間を流動化させる特殊な商品、つまり「貨幣」であることがこの描写からも理解されるのである。

この作品『虞美人草』はまさに「貨幣の死」によって安定した伝統的関係が復活することを描いた作品なのである。と同時に、この作品がまさにそうした伝統的な安定した関係が崩されつつあった危機の時代に書かれたことをも意味しているのである。

5 ジンメルとその同時代人の大都市経験

すでに述べたように、ジンメル「大都市と精神生活」は彼の大著『貨幣の哲学』を要約するものとして書かれた。『貨幣の哲学』にいたる途上の論文「近代文化における貨幣」のなかでジンメルはすでにこのように述べている。

「かの現物経済の時代に固有な、人格と事物をめぐる諸関係とのあいだのこのような融合状態を解体するのは貨幣経済である。貨幣経済は、人と一定の質をもった物とのあいだに貨幣や貨幣価値という、まったく客観的な、それ自体無性質な審判を介在させる。貨幣経済は人と所有物とのあいだに距離をつくり出し、両者のあいだの関係を媒介関係にする。¹⁰⁾

貨幣は、商品交換の人間関係の結晶体として登場する。つまり、貨幣は「交換価値」を体現する。すべてのものは交換価値(あるいはその体現者たる貨幣)から評価される。そして貨幣経済の進展した世界では、人間は貨幣の担い手として現れる。

こうした貨幣経済の支配する都市の空間を描いた先駆者とも言うべき人に、エドガー・アラン・ポー(1809-49)がいる。

彼は小編「群衆の人」(1850)のなかで、ロンドンの街を描く。語り手の私は喫茶店のガラス窓から街を行く人びとを眺めている。ふと私は不審な老人を見つけ、その後をつける。街をさまよう老人。彼は人がすくなく街の活気が少ないと鈍く歩き、街に活気があると活発に動き回る。結局私は疲れ果てて老人を追いつけることを断念する。ここでのブランウン運動のような老人の動きは、商品の中を激しく動く貨幣のメタファーにほかならない。フランス近代詩の創始者であるシャルル・ボードレール(1821-67)はこのポーの紹介者・訳者でもあった。彼は「群衆の人」に影響をうけて、「群衆」という散文詩を『パリの憂鬱』のなかにも書いている。この詩のなかで彼は、街行くひとひとり一人に心奪われ、その心のなかにはいりこむ詩人の想像力を、「魂の売淫」と呼んでいる¹¹⁾。

マルクスは『経済学—哲学草稿』のなかでこういっている。

「それ[貨幣]は一般的な娼婦であり、人間と民衆の間的一般的なとりもち役である。¹²⁾

道行く他人に心を奪われる詩人がいるのは、見知らぬ同士が貨幣という娼婦によってつかの間の交渉を成立させる都市の空間なのである。

ヴェルター・ベンヤミン(1892-1940)はその死後に、『パサージュ』という19世紀パリについての引用と覚え

書きを、まるでアーケードの商品のように陳列した作品を残している。彼はボードレールの「群衆」について『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』の中でこう述べている。

「ボードレールが『大都会の宗教的な陶醉状態』について語るとき、その陶醉の主体はなざされてはいないけれども、それは商品ではなかろうか。そして、あの『神聖な魂の売淫』——これと較べれば『人間が愛と呼ぶものは、まったくけちな、限られた、弱々しい者だ』といわれているもの——は、愛との愛との対置に意味があるとするなら、じっさい、商品のたましいの売淫以外のものではありえない」¹³⁾

そしてまさに「万博博覧会は商品という物神の巡礼場である。」¹⁴⁾

ここから漱石の同時代の思想家たちの大都市の考察が、『眞美人草』での展開とまさに軌を一にしているのがみてとれるだろう。

6 貨幣メディアの支配する都市

こうして、なぜ夏目漱石の『眞美人草』とジンメルの『大都市と精神生活』の一節は似ていたのかが、了解される。答えは、同一の交換価値の世界を扱っていたということにあったのだ。明治の後半になり、東京という都市は貨幣というメディア（媒介物）によってその欲望を螺旋状に昂揚させていく都市へと変貌しつつあったのである。両者の記述の一致はまさに両者の見ていた都市の様相の一致にほかならなかったのである。

注

- 1) 夏目漱石：夏目漱石全集4，190-191，筑摩書房，東京，1988.
- 2) Georg Simmel: *Brücke und Tür*, 1957, 酒田健一・居安正訳，ジンメル著作集第12巻（酒田健一ほか訳），270-275，白水社，東京，1994.
- 3) これはあくまでも小説のなかで「女」がそうした位置を持っているということを主張しているだけで、この論文の著者勝又の女性観ではない。
- 4) Claude Lévi-Strauss: *Les Structures Élémentaires de la Parenté*, 1967, 馬淵東一，田島節夫監訳，花崎皋平ほか訳，親族の基本構造，番町書房，東京，1977，1978.
- 5) 小宮豊隆：夏目漱石（中），299，岩波書店，東京，1987.
- 6) 夏目漱石：夏目漱石全集4，194，筑摩書房，東京，1988.
- 7) 夏目漱石：夏目漱石全集4，196，筑摩書房，東京，

- 1988.
- 8) 夏目漱石：夏目漱石全集4，261，筑摩書房，東京，1988.
- 9) 夏目漱石：夏目漱石全集4，205，筑摩書房，東京，1988.
- 10) ゲオルク・ジンメル：ジンメル初期社会学論集（大鐘武編訳）235，恒屋社厚生閣，1986.
- 11) ポオ，ポオドレール：世界文学大系37 ポオ：ポオドレール（小川和夫ほか訳）筑摩書房，東京，1973.
- 12) マルクス：経済学・哲学草稿（城塚登・田中吉六訳），183，岩波書店，東京，1964.
- 13) ヴァルター・ベンヤミン：ヴァルター・ベンヤミン著作集6 ボードレール（川村二郎，野村修編），75，晶文社，東京，1975.
- 14) ヴァルター・ベンヤミン：ヴァルター・ベンヤミン著作集6 ボードレール（川村二郎，野村修編），77，晶文社，東京，1975.